

# 目次

本書の使い方 … 8

第1章	第二言語習得 (SLA) 研究とは	12
	1. 第二言語 (L2) とは	12
	2. SLA 研究とは	13
	3. SLA 研究の基本的な概念	15
	4. 本書の立場	20
	コラム 01 ことばのコーパスは宝の山なれど	22
第2章	二つの言語習得観と言語転移のとらえ方	23
	1. L1 習得と L2 習得	23
	2. 生得主義と創発主義	27
	3. 生得主義と普遍文法	28
	4. 創発主義と用法基盤モデル	30
	5. 言語転移の変遷	32
	6. まとめ	36
	コラム 02 いろいろなことばの壁を越えて	38
第3章	「エラー」のとらえ方の変遷	39
	1. 間違いは避けるべきものなのか	39
	2. エラーは徐々に減るのか	41
	3. 誤用分析 — エラーから考えてみよう	43
	4. 中間言語研究 — L2 使用者独自の言語体系	47
	5. 中間言語研究を超えて — エラーから NTL へ	52
	6. まとめ	54
	コラム 03 たった一文字の違いでグローバル!?	55
第4章	SLA の認知プロセス	56
	1. L2 習得のプロセス	56
	2. インプットの必要性	58
	3. インターアクションの有用性	60
	4. アウトプットの重要性	62
	5. まとめ	64
	コラム 04 言語の4技能+?	66

第5章	個人差がSLAに与える影響	67
	1. L2習得における個人差	67
	2. 言語適性	68
	3. 動機づけ	70
	4. 動機づけの減退と動機づけ戦略	72
	5. 学習戦略と自己調整学習	73
	6. まとめ	76
	コラム05 もっと深めよう：「学習者×教師」の個人差	78
第6章	SLAの環境と特徴	79
	1. 自然環境と教室環境におけるインプットとアウトプット	79
	2. 留学という環境	84
	3. 教室環境における文法指導の効果	86
	4. 教師の役割とこれからの学習環境	88
	5. まとめ	91
	コラム06 留学したらペラペラになる？	92
第7章	社会とつながるSLA研究	93
	1. 多言語・多文化化する日本と言語サービス	93
	2. 日本語習得の落とし穴	97
	3. L1日本語使用者とL2日本語使用者という関係性	100
	4. まとめ	103
	コラム07 多言語表示の落とし穴	105
第8章	CLD児の言語習得	106
	1. 文化的言語的に多様な子ども（CLD児）とは	106
	2. CLD児のL2習得と年齢との関係	107
	3. CLD児のL2習得の目的と言語能力のとらえ方	108
	4. CLD児にとっての母語とは	110
	5. CLD児の母語とL2の関係	111
	6. まとめ	114
	コラム08 二言語「を」評価する？ 二言語「で」評価する？	116

<b>第9章</b>	<b>CLD 児への教育と支援</b> .....	117
	1. 日本国内の CLD 児を取り巻く現状と課題.....	117
	2. CLD 児のための国の教育政策.....	118
	3. 学校での CLD 児の受け入れ体制.....	120
	4. 教育・支援につなげるための CLD 児の状況把握.....	121
	5. CLD 児への日本語指導.....	123
	6. まとめ.....	127
	<b>コラム 09</b> パキスタンからやってきたマリムさん.....	129
<b>第10章</b>	<b>SLA 研究に基づく日本語指導 (1)</b> .....	131
	ーコミュニケーション能力を育てる	
	1. コミュニケーション能力とは?.....	131
	2. 外国語の指導法はどう変わってきたか.....	134
	3. フォーカス・オン・フォームとは.....	137
	4. 習得に効果的な訂正フィードバックとは.....	140
	4. まとめ.....	142
	<b>コラム 10</b> 文法さえ正しければいい?.....	144
<b>第11章</b>	<b>SLA 研究に基づく日本語指導 (2)</b> .....	145
	ー内容と言語のどちらも重視する	
	1. SLA 研究による理論に支持される指導法.....	145
	2. TBLT とは?.....	146
	3. CLIL とは?.....	148
	4. まとめ.....	151
	<b>コラム 11</b> 「あ! 地震!」の前に私たちができること.....	152
<b>第12章</b>	<b>SLA と評価</b> .....	153
	1. なぜ評価するのか.....	153
	2. なにを評価するのか.....	155
	3. どう評価するのか.....	156
	4. L2 使用者による評価.....	159
	5. まとめ.....	162
	<b>コラム 12</b> その「日本語能力」の評価、正しい?.....	164

第13章	SLA 研究の方法 (1)	165
	一 研究のタネを見つけて育てよう	
	1. 身近な疑問から始めてみよう	165
	2. 先行研究を調べてみよう	167
	3. 研究計画の問題点を考えてみよう	168
	4. 調査計画を立ててみよう	172
	5. 調査方法の工夫	173
	6. まとめ	176
	コラム 13 大きな象を観察する小人たち	179
第14章	SLA 研究の方法 (2)	180
	一 研究を实らせよう	
	1. リサーチ・クエスチョン(RQ)を立ててみよう	180
	2. 研究方法について考えてみよう	181
	3. 研究方法のアプローチ	187
	4. 結果と考察	193
	5. 研究の成果をシェアしよう	195
	6. まとめ	196
	コラム 14 言語ポートレート	198
第15章	SLA 研究の今、そしてこれから	199
	1. SLA 研究の知見とその応用	199
	2. 進化する SLA 研究	200
	3. SLA 研究の知見を活かす実践	204
	4. 近年の SLA 研究の展開	206
	5. 新たな SLA 研究	208
	6. これからの SLA 研究 — 「言語」・「ことば」についての考え方	209
	7. どのように研究するのか — 「一般化」か「個別性」か	211
	8. まとめと一言アドバイス	212
	コラム 15 L2 習得の「成功」とは	214

参考文献・参考 URL … 216

索引 … 223      付録 … 228

著者紹介 … 230

# 第1章 第二言語習得(SLA)研究とは

## この章のポイント！

第二言語習得(SLA)研究とは、「最初に習得した言語とは別の言語を習得する」というのはどういうことか、またどのように学ばれているのかを探究する研究分野です。皆さんも何か外国語を学んだ経験があると思います。この章では、そのような皆さんの経験も振り返りながら、「言語を習得する」とはどういうことか、どのような要因が関わっているのかなどを考え、第二言語習得研究がどのような分野の研究で、何に役に立つのかを知るきっかけにしてほしいと思います。

### ☑ キーワード

第二言語習得(SLA)研究、第二言語(L2)、第一言語(L1)、L2 使用者、目標言語、母語、母国語、JFL、JSL、教室環境、自然環境

## 1. 第二言語(L2)とは

まず始めに、第二言語習得(Second Language Acquisition : SLA)の第二言語(second language : L2)(以下 L2)とは何なのか、考えてみましょう。L2 とは、「生まれて最初に習得した言語 = 第一言語(first language : L1)(以下 L1)とは別の言語」ということです。例えば、日本語が L1 の人が英語を習得する場合の L2 は英語です。英語が L1 の人が日本語を習得する場合は日本語が L2 となります。では、両親が日本と中国の人で、日本語と中国語の両言語が L1 の人(いわゆるバランス・バイリンガル(→第 8 章参照))が英語を習得する場合はどうなのでしょう。また日本語が L1 で、英語を次に習得し、さらに韓国語を習得する場合はどうなのでしょう。このように、人は環境的な必要に迫られて、あるいは自らの自発的な関心から、いくつもの言語に触れ、それを身につけます。ですから、習得しようとしている言語が第 3 番目の言語(L3)、第 4 番目の言語(L4)、もしくはそれ以上という場合も珍しくありません。第二言語習得(SLA)研究(以下 SLA 研究)の世界では、このような「生まれて最初に習得した言語とは別の言語」を L2 と総称して扱います。つまり、SLA 研究は、L3、

## 第2章

# 二つの言語習得観と 言語転移のとらえ方

### この章のポイント！

この章では、言語習得についての考えを深めるために、まずはL1習得とL2習得の違いについて考えた上で、人のことばの習得に対する異なる二つの言語習得観(生得主義と創発主義)を押さえます。そして、SLA研究の潮流とともに変化してきた言語転移(L1のL2への影響)に関する考え方の変遷を見ていきます。批判的検討を重ねながら大きく変化を遂げてきた言語習得観の変遷とSLA研究の歴史を知り、教育や研究に必要な複眼的な視点を養っていきましょう。

#### ☑ キーワード

生得主義、創発主義、言語獲得装置、普遍文法、刺激の貧困、言語獲得の論理的問題(プラトンの問題)、用法基盤モデル、他者の意図読み、パターン発見、L1の影響、言語転移、マルチコンピテンス

## 1. L1習得とL2習得

人間(ヒト)は生涯、さまざまな言語に出会い、それを身につけていきます。言語習得(language acquisition)とは、ことばを身につけるということです。第1章でも述べたように、生まれ育つ環境において自然に身につける言語がL1(第一言語)、L1を身につけた後に習得する言語がL2(第二言語)とSLA研究では呼ばれます。このうち、L1は母語(mother language, mother tongue)と呼ばれることもあります。

習得される言語がL1の場合は、習得ではなく、獲得という用語が用いられ、L1習得という代わりに母語獲得という用語が用いられる場合もありますが、習得も獲得も“acquisition”の訳です。

L1については、生育環境で自然に身につける言語という定義のほかにも「優勢な言語」、「最初の言語」とする定義もあり、研究者や研究分野によって定義がゆれることもあります(鈴木・白畑 2012)。SLA研究におけるL1とL2の大きな違いの一つは、その言語より先に習得している言語があるかないかという

# 第3章 「エラー」のとりえ方の変遷

## この章のポイント！

日常生活では場面を問わず、何かを間違えることはできれば避けたいと思うことが多いでしょう。しかし、SLA 研究では発想が転換され、エラーはむしろ有用なものだと考えられてきました。この章では、L2 使用者の言語に現れるエラーが SLA 研究史の中で、どのようにとらえられてきたのかを見ます。現在の SLA 研究では、L1 使用者の言語を必ずしも学ぶべき規範とはしないという観点から、エラーを目標言語(TL)で使われる形式とは異なるもの「NTL:non-target-like」と呼ぶようになってきました。この動向に沿って、L2 使用者の言語に現れる NTL を今後どのようにとらえて、言語習得や言語教育が進んでいくのか、その展望を示します。

### ☑ キーワード

目標言語、エラー、誤用、誤り、正用、U 字型曲線、誤用分析、ミステイク、回避、中間言語研究、中間言語、定着化、化石化、マルチコンピテンス、NTL (non-target-like)

## 1. 間違いは避けるべきものなのか

学んだ外国語を使って、コミュニケーションを行うのは楽しいものです。まず L2 使用者の気持ちになるために、外国語の授業に参加している状況を想像してみましょう。



### 課題 1

あなたは外国語(L2)のクラスに参加しています。そこで先生に指名されました。あなたは慌てて答えましたが、その答えが間違っていたとわかりました。あなたはどんな気持ちですか。考えてみましょう。

自分の発言が間違っていたとわかったとき、恥ずかしい気持ちになったり、周囲に勉強ができないと思われたかもしれないと不安な気持ちになったり、あるいは、こんなことならば「わからない」と言えばよかったというような後悔

# 第4章 SLAの認知プロセス

## この章のポイント！

第3章では、NLT(目標言語で使われる形式とは異なるもの)を通してL2使用者独自の言語である中間言語について見ました。中間言語の研究からは、L2がどのように習得されるのかを知ることができます。これに加えて近年では、L2の習得がなぜ起こるのかという習得のメカニズムを解明する研究が進んでいます。L2を学ぶとき、皆さんの頭の中ではどのようなことが起こっているのでしょうか。L2習得の過程で何が起きているかを知ることは、効果的な学習や指導について考えるヒントになります。この章では、皆さんの経験と照らし合わせながら、L2習得のプロセスを見ていきます。

### ☑ キーワード

インプット、アウトプット、フィードバック、インターアクション、理解可能なインプット、 $i+1$ 、肯定証拠、否定証拠

## 1. L2 習得のプロセス

ここではまず、教室で外国語を学ぶ場面を例に、L2習得のプロセスを理解するための基本的な概念を説明します(→図1参照)。

L2習得はまず、聞いたり読んだりしてインプット(input)を受けることから始まります。教室であれば、教師やクラスメートの話、テキストの文章、視聴覚教材などがこれにあたります。そして学習者の頭の中でインプットが処理され、話したり、書いたりするアウトプット(output)として産出されます。アウトプットしたあとは、学習者が自分でスピーチや作文をチェックして修正を行うこともありますし、アウトプットを聞いたり読んだりした教師やクラスメートから反応(フィードバック(feedback))が返ってくることもあります。学習者が話したこと(書いたこと)が教師やクラスメートにすんなりと伝われば、相手はそれに適切に返事をしてくれるでしょう。しかし、意図が伝わらなかったときには、聞き返されたり、表現を訂正されたりするかもしれません。学習者自



# 第5章 個人差がSLAに与える影響

## この章のポイント！

SLA 研究には、大きく分けると(1)L2 習得の一般的なプロセスを明らかにする研究と、(2)L2 習得の個別性を明らかにする研究があります。前章までは(1)に着目し、多くの人に共通する習得プロセスについて見てきました。この章では(2)に関連して、人によって言語習得の進み方に違いが見られるのはなぜか、という個人差について見ていきます。L2 使用者として自分がどのようなタイプなのかを知ることは、自分に合った学習方法を模索する上で参考になるからです。また教師にとっては、多様なL2 使用者に接する際の態度や心構え、授業活動での工夫を考える機会になるでしょう。

### ☑ キーワード

個人差、言語適性、ワーキングメモリ、動機づけ、動機づけストラテジー、学習ストラテジー、自己調整学習

## 1. L2 習得における個人差

皆さんは、同じ外国語の授業を受けていて、自分よりクラスメートの方が早く上達したという経験をしたことはありませんか。または皆さんが教師なら、同じテキストを使って同じ授業をしているのに、上達が早い学習者とそうではない学習者がいるということはなかったでしょうか。



### 課題 1

目標言語の習得スピードや最終的な言語レベルに、人によって違いが生まれるのはなぜでしょうか。どのような要因が影響を与えるのか考えてみましょう。

L2 習得には、L1 と目標言語との言語的距離や学習時間、指導方法、学習環境(目標言語を日常的に使う環境かどうか)などの要因が影響を与えるといわれ

# 第6章 SLA の環境と特徴

## この章のポイント！

L2の習得には、学習環境の違いが影響するというのは、多くの人が漠然と感じていることではないでしょうか。この章では、日本社会における学習環境について、より具体的に考えていきます。まず、学習環境の中で、自然環境と教室環境について取り上げ、どのようなインプットやアウトプットの機会があるのかという点から比較します。さらに、留学など教室環境と自然環境の両方の機会を持つ混合環境に着目し、その特徴について概観します。その上で、L2習得には教室での指導効果はあるのか、インターネットが普及している現在、教室でどのようなことができるのかについて考えます。

### ☑ キーワード

自然環境、教室環境、混合環境、留学、明示的知識、暗示的知識  
インターフェースの立場、ノン・インターフェースの立場、

## 1. 自然環境と教室環境におけるインプットとアウトプット

L2習得の環境としてよく比較されるものに、日常生活の中で目標言語に触れながら学ぶ自然環境(naturalistic contexts)と学校などで学ぶ教室環境(instructed contexts)があります。ここでは、この二つの環境について考えてみましょう。筆者は秋田に住んで8年目になりますが、秋田に来たばかりの頃、スポーツジムで一緒になったフィリピン人女性と話をする機会がありました。彼女と日本人数人でおしゃべりに花を咲かせていると、日本人と結婚して秋田に住んで15年というその女性は「遅くなるとばっちゃんにごしゃがられる」(帰宅が遅くなるとおばあちゃん(義母)に叱られる)といそいそと帰り支度を始めました。周りが笑っている中、関西出身の私には何と言っているのか全くわからず、思わず「ごしゃがられるって?」と聞き返したことがあります。



# 第7章 社会とつながるSLA研究

## この章のポイント！

第6章では、自然環境か教室環境かという視点からL2習得の学習環境を考えました。この章では、学習環境の意味を広げ、多様な言語文化背景を持っている人たちが、日本で暮らしていくために必要となる環境整備という視点から見ていきます。まず、多言語・多文化化する日本における言語サービスや日本語学習支援の現状や課題について概観します。そして、外国人と呼ばれる人たち、日本国籍を持っていても日本語力の限られている人たちを「日本語学習者」という立場に固定化するのではなく、ともに社会を作るメンバーである「L2日本語使用者」としてとらえ直し、よりよい社会を作るためには、マジョリティ(多数派)、マイノリティ(少数派)双方にとって、どのような方策が必要なのかを考えます。

### □ キーワード

在留外国人、多文化共生、言語権、ネイティブ信仰、マジョリティ、マイノリティ、

## 1. 多言語・多文化化する日本と言語サービス

総務省統計局「人口統計」によれば、2021年3月1日現在、日本における15歳未満の人口は全体の11.9%で過去最低、その一方で65歳以上の老年人口は28.9%で過去最高となっています。日本の少子高齢化が進み、人口減少が続く中、国内の労働力不足や国際結婚、留学等による国際移動などにより、**在留外国人**の数は近年大きく増加しました。「在留外国人」というのは、法務省の「在留外国人統計」の中で用いられている用語です。日本における「外国人」というのは、出入国管理及び難民認定法の中では「日本の国籍を有しない者」として定義されており、「外国人」には同法によって定められた「在留資格」(日本に滞在するための許可)が必要となります。「在留外国人」とは、同法上の在留資格を持ち、三か月以上日本に滞在する「中長期在留者及び特別永住者」のことを指します。本書では、第1章及び本章冒頭のポイントでも述

# 第8章 CLD児の言語習得

## この章のポイント！

現代は世界規模での人の移動や交流がますます盛んになってきています。この流れの中で、子どものときから複数の言語や文化の中で育つ人たちが増えています。この章では、このような文化的言語的に多様な子ども（CLD児）の言語習得について取り上げます。CLD児たちの言語習得はどのようなことになるのか、成人の場合と何が違うのか、どのような点に着目する必要があるのかといった点について、SLA研究やバイリンガル教育分野の研究をふまえた上で、具体的事例を取り上げて考えます。

### ☑ キーワード

CLD児、臨界期仮説、BICS(生活言語能力)、CALP(学習言語能力)、母語、二言語相互依存説、トランスランゲージング、継承語

## 1. 文化的言語的に多様な子ども（CLD児）とは

皆さんは、文化的言語的に多様な子どもと聞いて、どのような子どもをイメージしますか。これは移民の多い北米などで使われる **Culturally and Linguistically Diverse Children** (カミンズ 2011)の訳で、頭文字をとって **CLD児**と呼ばれます。家庭の中で使用される言語と、その国の社会や学校で使われている言語が違って、生まれたときから複数の言語や文化に触れて育つケースや、成長の途中で国を超えて移住することで、接する言語や文化が変わるケースなどがあります。

### 課題 1

- ① 次のケースは CLD児のケースといえるでしょうか。理由も合わせて考えましょう。

みさえさん(仮名)：

大阪在住で公立小学校の1年生。幼稚園の年中のときから、週1回1時間、イギリス人の先生が開いている児童英会話スクールに通って

# 第9章 CLD児への教育と支援

## この章のポイント！

第8章では、CLD児の言語習得について、SLA研究、バイリンガル教育研究をふまえながら具体例を見てきました。この章では、その理論をベースにCLD児への教育・支援について考えてみます。CLD児への教育・支援を行うときには、どのようなことに気をつけなければならないのでしょうか。また、日本の学校教育現場では、実際にどのようなCLD児への教育・支援が行われているのでしょうか。日本のCLD児教育の現状と課題を概観した上で、具体的な教育・支援の実践例を見ていきます。

### ☑ キーワード

全人的な発達、JSLカリキュラム、JSL対話型アセスメントDLA、特別の教育課程、マルチ・リテラシーズ、取り出し授業、個別の指導計画、バイリンガル教育

## 1. 日本国内のCLD児を取り巻く現状と課題

日本国内在住のCLD児(文化的言語的に多様な子ども)の中には、インターナショナル・スクールや外国人学校に通う子どももいますが、多くが日本の学校に通っています。文部科学省が実施している「学校基本調査」を見ると、日本の国・公・私立の小・中・高等学校などに在籍する外国人児童生徒の数は2018年には10万人を超え、年々増加しています。またこの数は外国籍の子どもの数ですから、日本国籍を取得していても養育者のL1が日本語ではなく、家庭言語(家族の間で多く使われる言語)も日本語ではない子どもや、国際結婚家庭の子ども、長期間の海外生活後に帰国した子どもなどは含まれていません。実際にはもっと多くのCLD児が日本の学校に通っていると考えられます。

## この章のポイント！

外国語の指導法は、文法を重視した指導法から、コミュニケーションを重視した指導法へと大きな変遷を辿ってきました。現在は、コミュニケーションを重視しながらも、文法形式にも注意を向けるフォーカス・オン・フォーム(Focus on Form)を取り入れた指導が、多くの SLA 研究者たちから支持されています。この章では、外国語教育におけるコミュニケーション能力の育成をどのように行うことが効果的だといわれているか、指導法の変遷とともに学びます。その上で、フォーカス・オン・フォームの具体例について見ていきます。

## ☑ キーワード

コミュニケーション能力、PPP (文型ベースのアプローチ)、  
コミュニケーション能力、PPP (文型ベースのアプローチ)、  
コミュニケーション能力、PPP (文型ベースのアプローチ)、  
コミュニケーション能力、PPP (文型ベースのアプローチ)、  
訂正フィードバック、リキャスト

## 1. コミュニケーション能力とは？

皆さんが外国語を使って実現したいことは何ですか。筆者は、留学先でお世話になったホスト・ファミリーと再会したときに「もっとたくさん話したい！」という気持ちで英語学習を続けていました。このように、外国語を学ぶ人の多くが、その言語でコミュニケーションができるようになることを目標としているでしょう。



## 課題 1

皆さんの周りにコミュニケーション能力が高い人はいますか。コミュニケーション能力は、具体的にどのような能力を指すのか、また、どのような要素が含まれているか、周りの人やグループで話し合ってみましょう。

# 第11章

## SLA 研究に基づく日本語指導(2) ー内容と言語のどちらも重視する

### この章のポイント!

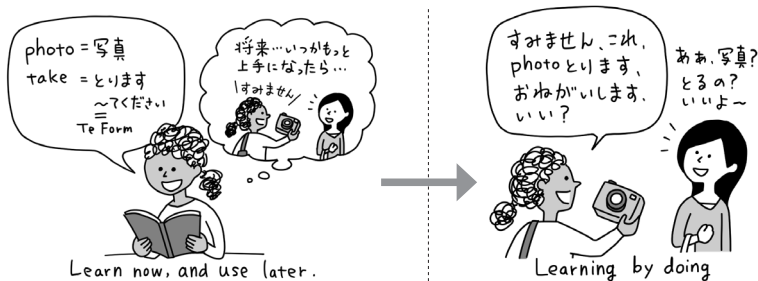
この章では、SLA 研究と結びつきが強い指導法として TBLT(タスクベースの言語指導)と CLIL(内容言語統合型学習)を具体的な実践例と共に紹介します。TBLT や CLIL は、内容と言語形式の両方を重視する指導法で、学習者の動機づけを高め、L2 習得を促進すること、そして言語以外の能力も育成できる可能性があることに期待されています。

#### ☑ キーワード

フォーカス・オン・フォーム、TBLT(タスクベースの言語指導)、CLIL(内容言語統合型学習)、インフォメーション・ギャップ

### 1. SLA 研究による理論に支持される指導法

第10章では、コミュニケーションな活動をしているときに、自然な流れの中で学習者の注意を言語形式に向けさせるフォーカス・オン・フォームという手法について学びました。フォーカス・オン・フォームの考え方に沿った指導アプローチとして、近年日本語教育では TBLT(Task-Based Language Teaching; タスクベースの言語指導)と、CLIL(Content and Language Integrated Learning; 内容言語統合型学習)が注目されています。どちらも“Learning by doing(今ここで使いながら学ぶ)”という考え方を持つ点で共通しており、それまでの文法重視のアプローチに見られる“Learn now, and use later(学習してから使う)”の考え方とは大きく異なります。



# 第12章 SLAと評価

## この章のポイント！

「評価」にはいろいろな意味がありますが、この章では日本語教育を用いてSLA研究を活かした教育実践における評価(アセスメント)に注目します。第10章、第11章で学んだ教室での練習や指導法によって習得できたかどうかを、どのような評価法を使ったら確かめることができるでしょうか。実は、「評価が大事なのはわかるけど、つつい次の授業の準備を優先してしまう」「そもそもテストの得点をどうやって語学の学習に活かせばいいかわからない」など、評価は難しいと思っている人が少なくありません。この章ではたくさんの専門用語が出てきますが、L2習得のためのより良い評価について考え、評価のイメージを変えることから始めてみてください。

### ☑ キーワード

自己評価、ピア評価、波及効果、妥当性、評価基準、CEFR、真正性、信頼性、ピア・レスポンス、代替的アセスメント

## 1. なぜ評価するのか

評価の目的は、いつ評価されたかによって異なります。ある授業で学習を始めるときに、どのくらい準備ができているかを調べるために行うのが**診断的評価(diagnostic assessment)**です。診断的評価の結果によって、授業に無理なく参加できる適性があるかを判断したり、習得状況に合わせたクラスに分けたり、L2使用者の学習目的(ニーズ)や個人差に応じて授業の目標や指導方法を調整したりします。診断的評価の方法は、クラス分けのためのテスト(プレースメント・テスト)だけではありません。アンケートや面接などでもL2使用者の情報を集めることができます。

授業が始まると、途中に小テストや中間試験などを用いて**形成的評価(formative assessment)**を行います。形成的評価は、L2使用者の習得状況を調べるために行います。形成的評価の結果を基に、教師は指導法を、L2使用者は学



# 第13章 SLA 研究の方法(1)

## 一研究のタネを見つけて育てよう

### この章のポイント!

この章では、SLA 研究を始める基本的な方法を学びます。まず L2 使用者の日本語の使い方や学習方法などに関する疑問や発見、悩みをスタートラインにしてリサーチ・クエスチョン(RQ: 研究課題)を設定します。続いて、研究方法が自分以外の誰にとっても具体的にイメージできるだろうかという視点でリサーチ・クエスチョンを問い直して、ブラッシュアップしていきます。身近な疑問からタネを見つけ、それを研究に育ててみましょう。

#### ☑ キーワード

リサーチ・クエスチョン(RQ)、量的研究、再認、再生、順序効果、ダミー、ターゲット、パイロット・テスト

## 1. 身近な疑問から始めてみよう

皆さんは、周囲の L2 日本語使用者と接していて気づいたことはありますか。あるいは自分の外国語学習について何か疑問に思ったことがありますか。ここでは、三人の学生が疑問に思ったことを報告します。まずは、その話を聞いてみましょう。



ユウキさん談

知り合いの留学生が、最近日本語でのやりとりをスムーズにできるようになってきています。母国では日本語を習っていなかったそうで、半年前、交流パーティで話をしたときには、何を聞いても困った顔で「わかりません。」と言っていたのに。外国人が日本語を習い始めて、上手に使えるようになるには、どのぐらいの時間がかかるのか気になります。



アカリさん談

ボランティア教室で私が担当している日本語学習者は、話しているときに「ある」と「いる」を何度も間違えます。どうすれば正しい言い方を身につけさせられるか、教え方を悩んでいます。

# 第14章

## SLA 研究の方法(2) 一研究をやらせよう

### この章のポイント！

第13章ではSLA研究のタネを見つけ、量的データを用いた量的研究を中心にRQのブラッシュアップ、調査研究の基本的なプロセスについて学びましたが、この章では、量的データに加えインタビューなどの質的データも用いてタネを「研究」として育てる方法について紹介します。SLA研究で用いられる質的データの種類、集め方、分析のアプローチの方法について学びます。また、量的データと質的データの両方を活用する混合研究方法についても紹介します。さらに研究成果を発表したり、シェアする重要性について学びます。

#### ☑ キーワード

構成要素、量的データ、質的データ、リッカート尺度、半構造化インタビュー、量的研究、質的研究、混合研究方法、横断研究、縦断研究、事例研究(ケース・スタディ)、エスノグラフィー

### 1. リサーチ・クエスチョン(RQ)を立ててみよう

第13章では、身近な気づきから研究課題であるリサーチ・クエスチョン(RQ)(以下RQ)を立てて調べてみることにについて考えました。身近な疑問を実際にデータで答えることのできるRQにするには、そのクエスチョンに含まれる要素、例えば、「上手く使えるようになるにはどのぐらいかかるのか」の「上手く」とはどのようなことか、「どのぐらい」はどのような時間を指すのかなど、それぞれの**構成要素(construct)**を明らかにする必要があることも、段階を経て見てきました。疑問に思ったままの形で表すだけではRQにはならないのです。では、まず、第13章で学んだことをふまえて、さらにRQを考えてみましょう。

SLA研究はヒトのL2習得のプロセス、その使用のメカニズムがどのようなものであるか、また、個々人のL2習得や使用がそれぞれのビリーフ、モチベーション、アイデンティティとどのように関わっているかなどを明らかにす

## この章のポイント！

本書で SLA 研究に初めて接した方は、まさにこれからが SLA 研究の知見を教師や研究者、あるいは自分が L2 使用者の立場として活かす始まりです。その始まりのために、この章では第 1 章から第 14 章までのポイントに触れながら、SLA 研究の動向をまとめ、近年の SLA 研究者の考え方や研究方法などの提言を紹介します。SLA 研究の考え方が社会の状況の変容に伴って大きく変化してきた様は、「進化」と表現してもよいでしょう。その常に進化し続ける SLA 研究の、今後の発展も探っていきます。

## ☑ キーワード

応用言語学、ポスト・メソッド、シンボリック能力、マルチモーダル、相互行為能力、エコロジカル・アプローチ、複雑性理論、複雑・動的システム理論、マルチコンピテンス、会話分析

## 1. SLA 研究の知見とその応用

本書は、これまで検証された SLA 研究の仮説や、研究で蓄えられた多くの知見のうち重要なものを紹介するだけではなく、その知見が皆さんにとって身近な課題である多文化共生や日本語教育・支援にどのように関わり、どのように活かせるのかに焦点をあてています。SLA 研究という分野そのものは、ヒトがどのように L2 を習得するのか、そのメカニズムを追究する学問ですので、必ずしも学習や教育などの現場へ応用するための学問ではありません。しかし、SLA 研究の知見を持つ人の中には、社会の問題解決を目指して研究を重ねる研究者や、教育者として、また、学生でも社会人でも実践者として活躍する人は少なくありません。例えば、アルバイト先や職場で日本語を L2 として使用する同僚や顧客の言語使用の理解にも幅広くその知見を活かすことができます。

以下、皆さんにも実践者として活躍していただくために、ここまでの章でみてきた本書のポイントを(少し説明を加えながら)簡単にまとめ、その後、最近の SLA 研究の第一人者の提言や、彼らが投げかけるこれからの課題について